

# 親鸞における仏道開頭の意義

——教化を手がかりに——

池 田 眞

## 一 はじめに

ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈に、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。ここをもって、聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。

『教行証文類』『総序』『定本教行信証』七（一五〇）頁・原漢文<sup>①</sup>

親鸞聖人（以下、敬称略）の仏道開頭は、如来の恩徳に対する仏弟子（愚禿釈）としての慶喜と讃嘆によって証されている。如来の恩徳を「総序」では、インド・中国・日本等の仏弟子が「長遠な時間と広大な空間、そして流転・苦悩し続ける——人間の闇に立ち上がり、求道し教化した行実<sup>②</sup>に等しい、と。あるいは、仏弟子の足跡である聖典や師釈は、あたかも如来の発遣——浄土へ往けという如来の勧めの声——と同じように「仰ぐ<sup>③</sup>」という。そのような

仏弟子たちの根底に共通する志願と行実―求道と教化―こそ、親鸞の信知する如来の恩徳といえよう。この如来の恩徳によって、遇い、聞きえた「教行証」―阿弥陀による仏道成就の法―を親鸞は「真宗」と敬い信じ、開顕しているのである。そして、自身のはからいをこえて―遇いがたく、聞きたい―真宗仏道は、仏弟子の求道と教化という法の伝承と、親鸞の求道、自身の苦悩・闇に向きあうという己証によって成就しているといえよう。この成就を親鸞は、遇うことの困難さ、聞くことの希有さの自覚をもって慶び・嘆じているのである。

今回は、親鸞における仏道教開顕の意義を学び、これからの教化の一側面に提言したい。

## 二

妻、恵信の手紙には、親鸞が、山（比叡）を出て、「後世」の闇を抱えて六角堂（聖徳太子）に、そして法然のもとを尋ねたとしたためられている。それによれば法然のただ一筋の「仰せ」を「うけ給わりさだめ」、そしてその「身」をもって、自身の「迷い」を人に伝えるまでになったという。時に一二〇一（建仁元）年の、いわゆる吉水入室という法然六九歳、親鸞二九歳の出遇いである。二〇年間の山での修行（堂僧）では仏道成就に至らなかった親鸞の内面。「後世」という後の世の救い、すなわち人生の闇・空過を抱えて、一人孤独に道を求め、遂に師教に出遇うこととなった仏法<sup>6</sup>。それがこの、

ただごせ（後世）の事はよき（善）人にもあし（悪）きにも、おな（同）じように、しょうじ（生死）い（出）

すべきみち（道）をば、ただ一すじ（筋）におお（仰）せられ候いしを、うけ給わりさだ（定）めて候いしかば、しょうにん（上人）のわたらせ給わんところには、人はいか（如何）にも申せ、たといあくどう（悪道）にわたらせ給うべしと申すとも、せせしょうじょう（世々生々）にもまよ（迷）いければこそありけめとまで思いまいらするみ（身）なればと、ようよう（様々）に人の申し候いし時もおお（仰）せ候いしなり。

『惠信尼消息』『定親全』三・一八七—八頁（聖典六一六—七頁）<sup>⑦</sup>

という一文から読みとることができよう。文意としては、親鸞の「後世」という現前の苦悩が、法然の仰せ・教化によって方向が決定したということである。そしてこの法然の教化に応えていく歩みが、周囲から惡道におもむくと言われても、自らの分限として引き受けていくと伝えるまでになったという。「人はいかにも申せ」「ようように人の申し」という、いわば縁ある人々の是非善惡のなかにあつて、よき人の仰せに導かれながら、「世々生々」という過去から未来を見据えた自身の現在を、親鸞は責任転嫁、さらに忘失することなく「迷い」という身の自覚において、立ち上がっていくのである。と同時に、「後世」という苦悩に、「善」「惡」の差別なく、「生死」の迷いをこえていく道を、「ただ一筋」に伝えるという法然の教化が、親鸞の生き方として開かれ、定まったということになる。「後世」という闇に向き合つて、苦悩をこえる道を伝えていくことが仏教であり、この今生の苦悩に向き合っている師の姿に、安心して死んでゆける自信をもったということになる。

とすると、親鸞にとっての仏道とは、人間の苦悩（後世）に向き合つて、平等（同じよう）に、救いの（生死出ずべき）道を、縁を尽くし身をもって伝え（ただ一筋に仰せられ）ていくことであつた<sup>⑧</sup>。それぞれが抱える後世と

いう苦悩によりそって教化する先師の辛勞。これこそが親鸞の了解する如来の恩徳であり、仏弟子として慶喜と讃嘆する内実といえよう。

曠劫多生のあいだにも 出離の強縁しらざりき

本師源空いまさずば このたびむなくすぎなまし

〔浄土高僧和讃・源空聖人〕・初稿本・『定親全』二・一二八〔四九八〕頁

源空光明はなたしめ 門徒につねにみせしめき

賢哲愚夫もえらばれず 豪貴鄙賤もへだてなし

〔前同〕『前同』二・一三三〔四九九〕頁

この和讃からも親鸞は、苦悩する人々に向き合う本師源空（法然）の教化、行実、を読みとることができる。そして「門徒」への光明、開放を説いた足跡を、『教行証文類』において「浄土真宗」と掲げ、この師を生み出した志願、教説を尋ねあて、「真実の教」として顕らかにしていると了解したい。

大無量寿経 真実の教 浄土真宗<sup>④</sup>

〔『定本教行信証』七（一五〇）頁・「の」は原文「之」〕

くわえてこの法然との出遇い、値遇を通して、遠くインド・中国、そして日本へと時空でつながった仏弟子、僧伽の形成、三宝成就があったといえよう。

仏―本師源空、法然

法—光明、出離の強縁、仰せ、生死出ずべきみち

僧—賢哲愚夫、豪貴鄙賤、門徒、善き人にも悪しきにも

### 三

『教行証文類』の序（総序）と「教文類」の間において、親鸞は「大無量寿経」と挙げ、「真実の教」「浄土真宗」の言葉を掲げた（標挙・総標・宗要）。その実体験にかえすと、「同じように、生死出ずべきみちをば、ただ一筋に仰せられ」る法然の行実の根源は「大無量寿経」の阿弥陀の本願であり、その「仰せ」を「真実の教」と決定し（うけ給わりさだめ）、「浄土真宗」—仏道宣言—として終生、慶喜讃嘆<sup>⑩</sup>している。次の和讃からも、うかがえる。

智慧光のちからより 本師源空あらわれて

浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまう

〔浄土高僧和讃・源空聖人〕『定親全』二・一二七〔四九八〕頁

阿弥陀如来化してこそ 本師源空としめしけれ（り）

化縁すでにつきぬれば 浄土にかえりたまいにき

〔前同〕『前同』二・一三五〔四九九〕頁

法然の和讃二十首については、行実・教義・伝承等の教化についての讃嘆であるが、口伝、伝聞も含め、親鸞に

とって法然の仰せは、人格をもってあらわれた阿弥陀如来、あるいは勢至菩薩（応化身）の教化であり、浄土真宗の開宗、公開の意味をもっている。その仰せの根源が『大無量寿経』に説かれる阿弥陀の選択本願であり、この師教との値遇をとおして、真実の教としての浄土真宗を讃嘆している。

浄土宗のなかに真あり、仮あり。真というは選択本願なり、仮というは定散二善なり。選択本願は浄土真宗なり、定散二善は方便仮門なり。浄土真宗は大乘のなかの至極なり。

（『末燈鈔』第一通『定親全』三・六二頁〔聖典六〇一頁〕）

それでは、この法然によってひらかれた浄土真宗という仏道を、親鸞はどのような了解しているのであろうか。「教文類」を見てみたい。

#### 四

謹んで浄土真宗を按ずるに、二種の回向あり。一つには往相・二つには還相なり。

（「教文類」『定本教行信証』九（一五二）頁）

親鸞は、「教文類」の冒頭に、浄土真宗を、回向の仏道であると尋ねてあて、そして往相、還相という二種に示している。では、往相、還相とはどういう意味であろうか。その一端を「浄土高僧和讃」に照らしてみると、

弥陀の回向成就して 往相還相ふたつなり

これらの回向によりてこそ 心行ともにえしむなれ

〔曇鸞和尚〕『定親全』二・九三（四九二）頁

という、阿弥陀仏の回向成就と示されている。そして親鸞は、「往相還相ふたつなり」の左側に「往相はこれより往生せさせんと思し召す回向なり。還相は、浄土に参り果ては普賢の振る舞いをせさせて衆生利益せさせむと回向し給えるなり」と註釈しているように、往相は（行者を）往生させる導きであり、還相は浄土へ生まれて、普賢菩薩のように衆生利益をさせようという、共に阿弥陀の導き（回向）、めぐみと了解している。

つまり、先の「教文類」の言葉が、親鸞にとって仏道とは、浄土真宗であり、この浄土真宗とは、阿弥陀が示す（行者の）往生と衆生利益を、私たちに回向する教え（宗教）と言っているのである。行者の回向による仏道成就が自明とされるなかで、親鸞は、仏の回向・はたらきかけを、『大無量寿経』という教説から、往相還相による仏道成就として、浄土真宗を尋ねあてているといえよう。

したがって、真実の教を決定する親鸞の始終が、「謹んで浄土真宗を案ずる」という、如来の教化（求道）の真意を顕らかにするのであって、一釈迦の教説・經典の中から、どの教えが真実の教えなのかという―人間からの見定め・問題設定ではなく、阿弥陀は、何を根本（回向）として、どのような救済法（四法）で、衆生に仏道（浄土真宗）を成就させようと願ったのか。その如来の願心（大悲心）の真実を尋ねているといえよう。その如来の願心を「行文類」では「諸仏称名の願」と示し、「信文類」は「至心信樂の願」、そして「証文類」は「必至滅度の願」として掲げ、衆生が成就すべき教行信証という『大無量寿経』の法、骨組みを『教行証文類』において顕らかにし

ていくのである。その意味において、親鸞の往相・「往生せさせんと思し召す回向」は、阿弥陀が、私たちの仏道成就を願ひ本願をたてた教説をもって、現在にはたらしき——大行と大信——そして無上涅槃を証せしめる導きを慶んでいるといえよう。それを親鸞は教説として「大無量寿経 真実の教」と讃嘆していたのである。

## 五

親鸞は、如来の教化（求道）の真意を「大無量寿経 真実の教」と受けとっている。

それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。この経の大意は、弥陀、誓いを超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れみて、選びて功德の宝を施することをいたす。釈迦、世に興して、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもってせんと欲すなり。ここをもって、如来の本願を説きて、経の宗旨とす。すなわち、仏の名号をもって、経の体とするなり。

〔教文類〕『定本教行信証』・九（二五二頁）

どうして、真実の教えが『大無量寿経』であるのか。その了解は、「弥陀」「釈迦」による「凡小（ほんぶ）」「群萌（ひとびと）」への「功德の宝である名号を選んで施し」「真実の利益を恵もうと欲（おも）われる」<sup>15</sup>という、如来による衆生教化に仏意を見出すものである。この親鸞の決定は「経典の比較や優劣」<sup>16</sup>「思弁や論証」などの客観的というよりは、「凡小」「群萌」への哀愍・救済という一点に注目する主体的な宣言といわなければならない。



先にみた法然の教化・仏道観と、『大無量寿経』の精神・教説そのものが一つになって、真実の教、すなわち仏教の根本に何があるのかを断定したといえよう。すなわち先の恵信尼消息の伝える「善き人にも悪しきにも」という「凡小」「群萌」に寄りそい、その救いとなる「生死出ずべきみち」という「功德の宝」「真実の利」を伝えるところに、親鸞における仏道の「真実」を見出しているのだ。如来が世に出世した理由は何か。如来の最も優先する事業は一体何なのか。それが衆生教化、救済ということである。

そのことを、親鸞は如来の本願を「宗」（宗要、肝要、精神など）とし、願心を言葉にあらわした名告り、すなわち南無阿弥陀仏が教説の「体」（本質、帰結、全体、肉体など）となったところに『大無量寿経』の肝（概）要として、仏の課題を尋ねあてたといえよう。浄土真宗という仏教は、一凡小・群萌（法蔵自身）の救済を念じる本願、誓願にたち―苦悩する衆生にむきあって、汝をたすけんと立ちあがった宣言・名告りをもつ救済の法なのである。あるいは、すべてのものが救われていくという精神をもって、縁を尽くしてその願心を言葉・形にして回向する教えである、と。

したがって親鸞は、その名号―衆生の救済を成就する究極の表現・言葉―を通してその如来の本願を聞きとる念仏信心―如来の慈悲心が行者に現成する自覚―をもつて、『大無量寿経』の宗致、他力真宗の正意<sup>18</sup>として顕らかにしているのである。

## 六

ここまで先人の指摘に照らすと、さきほどの「教文類」は、「浄土真宗の教理の大綱」（真宗大綱）と、「浄土真宗の真実教、所依とする根本聖典を挙げる」（真実教）と了解される一段である。「謹んで浄土真宗を案する……（略）」については、教理の大綱として、阿弥陀如来が衆生にあたえた、浄土に往生するための往相、還相という骨組みを示している。そして浄土への往生も、還相も弥陀如来のはたらきによるという指摘である。また、「それ、真実の教を顕さば……（略）」を「真実教」と示す点は、『大無量寿経』とその大意、文意の肝要として、弥陀の招喚と釈迦の発遣を通して浄土への道を、六字の名号として衆生に恵施されているということである。すべての人々が救われていくという教えが、真実であり、親鸞の始終になっている。

あらためて如来の恩徳・法然に導かれ親鸞に成就した浄土真宗という仏道は、どのような志願（方法）によって、衆生に仏道を成就させるのであろうか。それは、阿弥陀による衆生救済の本願を根拠とし、救済となる南無阿弥陀仏の行、実践が回向されるところに仏道成就があり、それが浄土真宗ということである。南無阿弥陀仏と念仏を申すところに阿弥陀の本願を聞くのである。

では、念仏申し阿弥陀の本願が行者に届くというのはどういうことなのであろうか——。このことこそ「教文類」のなかで、親鸞が真実の教を推求した一文、すなわち出世本懷（発起序）ではないだろうか。

何をもってか、出世の大事なりと知ることを得るとならば

〔教文類〕『定本教行信証』・九（二五二）頁

試みに意識すると、「どのようになれば、（釈尊が）この世に出られた一大事（根本）を知ることになると言い切れるのか」となる。そして、この一文から少なくとも二つの課題を読みとることができる。一つは「出世の大事」という釈尊出世の本意と、もう一つは「知ることを得る」という、私たちに仏の出世の意義がどこで了解できたといえるのか——という課題である。

一つめの「出世の大事」であるが私は、釈尊をはじめとして諸仏の一生が、『大無量寿経』の一代であったと了解したい。

お釈迦様の出世の本懐、「出世の大事」が『大無量寿経』として説かれてある。この世に出生された一大事因縁を『大無量寿経』として説かれてあるということ。お釈迦さまのご生涯は、『大無量寿経』のご生涯だと。お釈迦様はたくさんの方の経典を説かれておられます。ところがここからいえば、お釈迦様の覚りは、「出世の大事」を覚られた。「出世の大事」があきらかになったのではないですか。この世に生まれ出られたことの意味、出生したという一大事が持つ意義をあきらかにする。「出世の大事」に目覚められた。

（池田勇諦『教行信証』に学ぶ（四）『真宗大谷派東京教務所・二〇一二・要略筆者』）

これは、従来のいわば諸經典の検証からの『大無量寿経』の優位性を語る出世論ではなく、

如来、無蓋の大悲をもって三界を矜哀したもう。世に出興する所以は、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに

真実の利をもってせんと欲してなり。

〔教文類〕『定本教行信証』・一一―三（二五三）頁

と示されるように、仏、如来が大悲心をもって、出世する本懷が「道を示す教えを広くあきらかにし、群萌（ひとびと）をすくうために、真実（まこと）の利益を恵もうと欲わ<sup>(20)</sup>れたことである」という、法然をはじめとする三國の仏弟子の教化・一生の根本を親鸞は顕らかにしているということである。

次に、もう一つの「知ることを得る」という、私たちがどこで、仏の出世の意義を了解できたといえるか、である。

親鸞は『大無量寿経』を真実の教として顕らかにしているが、その根拠すなわち「明証」は阿難と釈尊の出会い、問答によっている。その中心が阿難による釈尊への讃嘆（五徳現瑞）と、仏の光の根拠を過去、未来、現在の仏たちが念じあっていた（仏仏相念）という、いわば仏の功德と歴史への気づき・感動をもって真実教の証明としている。つまり、それはあの無量光、無量寿という空間、時間をこえて、「いつでも」「どこでも」という縦横にひろがりをもつ仏の光・はたらきが、阿難に届いていたという驚きを示しているといえないだろうか。仏の覚りである智慧が自利に留まらず、すべての人びとに開かれなければならないという利他、慈悲の教化へと展開した、その仏と歴史への目覚めである。この智慧と慈悲の展開の歴史、すなわち如来の教化（求道）の伝承、本願と名号―願心の表現化―の相続に阿難が気づいたのだ。この仏の教化の辛勞に出遇うことの困難さ、希有さへの気づきこそが、「知ることを得る」という内味ではないだろうか。

無量億劫に値いがたく、見たてまつりがたきこと、靈瑞華の時あって・時に・いまし出ずるがごとし。

〔教文類〕『定本教行信証』・一三（一五三）頁

三千年に一度花が咲くという「靈瑞華」のような、いわば千載一遇の出来事・連続してきた教化（求道）なかに、私たちは存在していたという信知である。

なおこの出遇い・真実教の決定については、すでに廣瀬杲師<sup>②</sup>、一楽真先生の指摘、すなわち従来の經典の比較ではなく、阿難の目覚めに注目した洞察があるので引用したい。

親鸞は「顕浄土真実教文類一」において、『大無量寿経』に説かれる釈尊と仏弟子阿難の問答に着目している。それは、長年、釈尊に常随昵近してきた阿難が、普通の法に立っている釈尊に改めて出会うという出来事であった。逆から言えば、それまで気づかなかった世界に出会ったのであり、阿難自身に变革が起こったことを意味する。今までと異なった見方が、釈尊自身も「諸仏を念じたもう」存在であったという気づきである。これが今までの阿難にはなかったのである。釈尊が入滅しても滅することのない法があることに気づいたのである。ここには釈尊の入滅を超えて成り立つ仏道との出会いがある。言わば、時代を問わず誰においても成り立つ平等の法である。釈尊自身はすでに説いてくださっていたのであるが、阿難はこの日に初めて聞こえてきたのである。ここに「仏説」ということが、聞く者をまっぴらして成立することが知られる。

（一楽真「聞の成就としての仏説」『日本仏教学会年報 第七六号』二〇一一・筆者要略）

これはつまり、釈尊の法が阿難の上に顕らかになったという事実を、親鸞が「顕真実教」と押さえるという指摘で

ある。その事実とは、阿難、すなわち聞く者の変化によって成立しているという確めである。ただ注意を要する深さをもっていると思われる。私たちの平生の中で一言してみたい。

## 七

聞く者の変化・翻転によって成立するという真実教の決定・確かめの強調は、生活のなかで、ややもすれば無意識のうちに、受け手（相手）に、問題の所在を見ていく姿勢となっていく傾向はないだろうか。具体的には、教師（僧侶）と門徒、教員と学生における授業、勤行、聞法、座談等のなかで聞く側の問題、力用に集約し、伝えられていくことである。

一例であるが、仏本法要、法話の内容が、門徒、信徒や学生たちに伝わらない表現・形式で行われている実際がある。いうまでもなく眼前の門徒、信徒や学生たち<sup>(2)</sup>に、今日の後世の闇がある。しかしそのことにまったく触れない形で、仏教の儀式や教義の核心が一方的に発信され、宗教学校で言えば、宗教行事に参加した学生、生徒の感想として「仏教って、結局おれたちの悩みとは関係ないんすね。」という事態になっていないかという問題である。どうして、仏教を必要としている人の闇によりそわない仏教教化がそのまま放置されて今日に至っているのだろうか――。

――それが、仏教に出遇うのは、相手の変革次第、相手の問題である、という一面はないだろうか。阿難の変革、

すなわち教えに出遇った体験を僧侶・教員が過去化、絶対化すれば、必ず親鸞当時のあたかも南都北嶺のように、山に上がれ、という視点を相手に要求していくのではないだろうか。自らの境地、理解、到達点にすべての答えがあるのである。しかし親鸞は、いうまでもなく山を下りたのである。つまり衆生の苦悩の中に、自らの報恩の役割を見いだしていったのである。苦悩を解決するのは、あなたの聞法・精進次第というような姿勢ではないのである。あの『歎異抄』の門弟にむかって言われた「面々の御はからい」<sup>(23)</sup>とは、門弟たちの疑問、不安、苦悩を「御ころざし」<sup>(24)</sup>として十二分にうけとった上の言葉ではないか。言葉にならない世界を言葉であらわし、苦悩する衆生につながり、よりそう慈悲心の表現・形こそ、浄土と名乗る仏教ではないだろうか。

その意味で、『教行証文類』における阿難とは、仏教を聞いてきたと自負する「聖道の諸機、浄土定散の機」「諸寺の釈門」「洛都の儒林」等といえないだろうか。「座より立」<sup>(25)</sup>つという変革を今現在、願われていたのは、初学者ではなく十方衆生なのである。私たち一人ひとりの仏道の歩みを問い返し、仏弟子として仏の真実に出遇わしめる永劫の回帰の出来事こそ、「長老阿難」<sup>(26)</sup>の目覚めではないだろうか。

——仏・法・僧とは、私たちに何を問いかけ、何を大事に世を生きていくのかと。

## 八 おわりに——声を聞く

ところで、二〇一一年に東日本大震災・原発事故があり、来春で三年目にあたる。二〇一一年は、親鸞の七百五

十回の法要の意義の確かめ、準備のなかにあり、震災報道をうけて、私にあったのは「支援物資をもって被災地へ行きたい」「何か役に立ちたいという」という思いであった。縁ある先生や先輩方に、被災地支援の情報を集めていたが、結果的には、三月三〇日に三重教区での教務所長はじめ社会教化小委員会のメンバー、その他有志が集い、私がようやく被災地と向きあう活動を開始できた。その立ち上げは、以下の文面である。

この度の東日本大震災を知らされ、私たちはどのような生き方が願われているでしょうか。そして数年前より親鸞聖人のご法要（七五〇回御遠忌）の準備や参詣に遇い、先人の導きや現代の社会的役割を考えさせられます。そこで三重教区に縁のある門徒・僧侶、別院・地域の方々とつながって、老若男女が集う活動・人生の学びを模索（聞法）しております。

現在も、三重教区（東日本大震災）有志の会として、支援物資や現地や教区での活動、法要等を行い、またこの活動から福島の子どもの保養プロジェクトにいたっている。しかし現在、そして自身の被災地支援という思いはどのようなになっているのだろうか。象徴的な言葉を借りれば、

震災が起こった時、私たちは心のどこかでモノやお金は便りにならないと感じ、助け合いやつながりの大切さに気づいたように思う。しかしあれから二年半が経過した今、あの〈共同体感情〉は、いつの間にか〈経済成長のなかに幸せがあるのでは〉という幻想に替わりつつある。<sup>(27)</sup>

というような、つながって助け合うという雰囲気、気づきも、結局、個人の利益、満足に没していくようにも感じられなくもない。あるいは、以下の文面は厳しい。



とくに気にかかっていた言葉は「寄り添う」という言葉。被災地では「絆（きずな）」と同様に頻繁に使われていて、耳触りの良い言葉ですが、じつは、この言葉ほど、人に覚悟を迫る言葉はありません。介護の現場の場合、支援する人、寄り添う人が離れたら、介護されている人は命を落としてしまう。だから支援する人、寄り添う人は逃げ場がない。関わりつづけなければならぬ。そういう厳しい覚悟を問われる言葉になっています。われわれ、被災地で活動しているメディアの人間は、「共に生きよう」とか、「寄り添う」ということに、一度きりではあり得ないんだというそういう覚悟を持って関わりつづけなければならぬ。震災はもう三年目。わたしは記者歴三三年、五六歳になりますが、これはもう、人生の問題になっていますね。<sup>(28)</sup>

## （二〇一三・六・一二・水）

この一文から寄りそうという意味の重さ、関わることへの負担、あるいは継続性・持続性の構築、そして自己中心の在り方を知らされる。しかし、そのような指摘、現在の雰囲気、自身の問題を含めて、実はいにしえから諸仏が念じ続けた流転する人間、その歴史、生活そのものののだろうか。やはり一人ひとりが、それぞれの現場<sup>(29)</sup>へ向かい、その声・課題をいただき、共に闊法していく。いわば、「いっしょに考える仏教」というような志願・歩みこそ、阿難が釈尊に、そして親鸞が法然に感じとった教化に対する――連綿と続く仏弟子としての報恩――慶喜・讃嘆の一側面になるのではないだろうか。

信頼の根を養うということ、ふと連想することがある。NHKの連続ドラマ「カーネーション」〔二〇一一年一〇月～一二年三月・脚本、渡辺あや〕で母親が、挫ける夫や子どもたちを口で慰めるより手でいとしく撫

でるシーンが、強く心に残っている。それぞれの背中越しに、「しんどいねえ」「くやしいねえ」とつぶやくシーンである。そしてずっと思っていた。この間、政治家・官僚や原子工学者や電気事業者らが、もしこのような場所からこのようなつぶやきを、被災地の人たちに、国民に届けようとしていたら、専門家への信頼もこれほど損なわれることはなかったろう、と。信頼できる専門家とは、特別な能力のある人でもじぶんたちに代わって責任をとってくれる人でもなく、だれにも答えない問題を「いっしょに考えてくれる」人のことだからである。

（驚田清一「信頼の根を養うということ」『中日新聞』二〇一二年六月一三日・要略・括弧筆者）

## 註

（1）東本願寺『真宗聖典』の頁を「」に記し、『定本親鸞聖人全集』は、『定親全』、法然聖人、親鸞聖人等の敬称を省略した。漢文は書き下し、句読点など適宜補い、歴史的仮名づかいは、現代表記に改めた。

（2）「師主のおしえをおもうに、弥陀の悲願にひとしと也」（『尊号真像銘文広本』『定親全』三・一一四（五三〇）頁）「如来ともうすは、諸仏ともうすなり」（『前同』・一一七（五三一）頁）とあり、三帖和讃においても、親鸞は、七高僧を諸仏として仰いでいる。

（3）「総序」では、如来の発遣を「仰ぐ」と記されるが、『浄土文類聚鈔』の巻頭では「ここに片州の愚禿、印度・西蕃の論説に帰し、華漢・日域の師釈を仰ぎて、真宗教行証を敬信す」（『定親全』二・一三一（四〇二）頁）とあり、論説・師釈の導きも、如来と同じように「仰ぐ」という親鸞の敬信の心を感じとることができる。

（4）「いまこの（阿弥陀の）願にあえることは、まことにこれおぼろげの縁にあらず、よくよくよこびおぼしめすべし。たとひまたあふといふども、もし信ぜざればあわざるがごとし。いまふかくこの願を信ぜさせたまえり、往生うたがひおぼし

めすべからず。かならずかならずふたごゝろなく、よくよく御念仏候て、このたび生死をはなれ極樂にむまれさせたまふべし。』(『西方指南抄』『下本』『定親全』五・三三・五六頁・括弧は筆者、なお『和語燈録』にも見える。)

(5) 仏道成就の因としての信心も、いわば人間の修学・修道によって必ず獲得できる、と行者側からは言えない。そもそも、修学・修道へ導く発心も、行者自身をこえて生起している。仏との出遇いは、行者自身の求道する心・発心と、仏が教化するという大悲心との千載一遇の機縁をもって成就していたという自身への信知といえよう。

(6) 第一には、「竊かに以みれば、聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道いま盛なり。」(後序「化身土文類」『定親全』一・三八〇(三九八)頁・原漢文)の一文をあげたい。親鸞の主眼は「仏道を証得する」という実現的成就か、空過かであった。すなわち、真に人間を迷いの世界から出離させ、仏道を行ぜしめ、さらに仏教本来の目的である「大涅槃」を証得させるか、否かの実質性を問題にしたと了解している。

(7) ただ後世のたずかることは、善人であろうと悪人であろうと差別なく、同じように生死の迷いを出ることのできる道を、ただ一筋にお説きになったのを承り、これこそ心を定めてしまいましたが、上人のおいでになるようなところには、人がどのように申してもたとえ悪道におちてゆかれるにちがいない、と申しても、お供をしよう。これまで世々生々迷っていたからこそ、こうして生きてきたのだろうと思っているこの身でありますからと、さまざまに人が申しましたときも、殿は仰せになったのです。(松野純孝監修『親鸞の妻 恵信 十通の手紙(恵信尼文書)』二〇〇七・二九・三〇頁、参照)

(8) 覚如の『本願寺聖人伝絵』においても、いわゆる「行者宿報」の偈文のところが、女犯という個の妻帯、あるいは破戒という苦悩に応答する仏の示現を、「一切群生にきかしむべし」ということで、仏道の成就をみている。

(9) なお、この言葉は東本願寺蔵の真蹟本にはないが、西本願寺蔵本、専修寺蔵本に見える。そしてその裏側に、「顕真実教一 顕真実行二 顕真実信三 顕真実証四 顕真仏土五 顕化身土六」の列名がある。

(10) それは、同時に「大無量寿経 真実の教 浄土真宗」という標榜こそが、自らの仏道だけではなく、『教行証文類』の跋文(後序)に見られる「諸寺の釈門」「洛都の儒林」、あるいは見聞する者に対する、法然の門徒としての親鸞の仏道宣言であり、無辺の生死海を尽くす親鸞のいわば今現在の呼びかけであると了解している。さらに推測が許されるなら、南都北嶺などの寺院や数多の僧侶が存在するが、何をもちて仏教というのか。何を真実の仏教というのか、その仏の意を「大無量寿経」「浄土真宗」として尋ねあてたのである。

- (11) 全二〇首について、一首目から十首は「人格上の指導―浄宗開立・一代遺徳・本地讃仰―」、一一・一二首は「教義上の指導―選択集の要義―」、一三首以下は「御臨末の追讃（追想・讃詠）」という指摘を参照。（柏原祐義『三帖和讃講義』平楽寺書店・一九一七・七二四―六頁、要略）

- (12) 左訓『浄土高僧和讃・曇鸞讃』・初稿本・『定観全』二・九三―四頁

- (13) よく知られる指摘をふまえると、従来の日本仏教の回向の一端が、仏道修行によって体得された功德・善根を、「衆生回向」「菩提回向」「實際回向」という、衆生、自身、真理に向かいあって、行者がさしむけて（回向）、他者、自己、自心を利益するという了解になろう（いわゆる自力の回向）。（赤沼智善・山辺習字『教行信証講義 教行の巻』法蔵館・一九五一・八九頁・要略）行者自身を軸とする思い・はたらしかけである回向ではなく、仏の慈悲・導き（回向）によって、ようやく仏道を成就できるという親鸞の了解がある。

- (14) 『教行証文類』六巻の冒頭を原文（漢文）の表記で記す。「謹案」は、「教文類」「行文類」「信文類」「真仏土文類」、「謹顕」は、「証文類」「化身土文類」になる。六巻に共通する親鸞の心は、「謹んで」という阿弥陀が成就せんとする浄土真宗の仏道に対する、敬信・帰依・敬虔の姿勢となる。

- (15) 『解説教行信証 上巻』東本願寺出版・二〇一二・八頁、参照。

- (16) 一楽真「顕真実の明証」『大谷学報七五―三』『二八六』・一九九六、参照。

- (17) 安田理深『救済の智慧と自覚の智慧―浄土真宗の中心問題』大谷出版社・一九五五・六九頁参照。「本願それ自体は一如である。一如の本願が一如の体のままで、如来が如来自身を失わずして衆生の足となる。だから名において現行している。本願現行の名、名は決してものをあらわしているものでない。道元は現成公案という。本願の現成である。本願の現在、本願の現実とは行としてある。」傍点筆者。

- (18) 『行文類』『定本教行信証』八四・二〇三頁

- (19) 赤沼智善・山辺習字『教行信証講義 教行の巻』法蔵館・一九五一・八七一―一〇頁、参照。

- (20) 『解説教行信証 上巻』東本願寺出版・二〇一二・一一頁、参照。

- (21) 「この問（出世の大事）は、親鸞にとって『大無量寿経』は、ただ如来の出世本懷の事実の主体的に出会い、その正機としての自己自身に目覚めることに外ならない。親鸞は、その領きを「仏仏相念」に見定めた。まさしく眼前に釈尊五徳の瑞

相を拝見した仏弟子阿難の驚きをもって、開かれることとなったのである。言うまでもないことであるが、五徳の瑞相とは釈尊の身に現われた姿である。しかし同時にそれが、阿難における希有心の内容、すなわち常随昵近の弟子阿難の驚きが、釈尊の現相を内実とするところに、阿難自身の自覚の世界を感じたものというべきであろう。『真宗教済論』法蔵館・一九七七・一〇六―八頁、要略・括弧内は筆者。

- (22) 「校内に理解者がいる、という安心感が、学生の悩み・実習等の心を支える」「教員と学生が共に成長することを根本に」(要約)。橋本景子「短期大学におけるカウンセリングについての一考察」『高田短期大学紀要 第三一号』(二〇一二)。筆者も学生から友人関係、親の離婚、進路への自信なさ、いじめ、学費等の話を聞く。また当然のことではあるが、従来の伝統的儀式や教義をすべて否定するつもりはない。「如来の作願をたずねれば 苦悩の有情をすてずして 回向を首としたまいて 大悲心をば成就せり」(「正像末法和讃」・草稿本・『定親全』二・一五一〔五〇三〕頁)。とあるように、この和讃の心がいたただけたとすると、私たちはどのように苦悩、自他と向き合うのかを今後も学んでいきたい。

(23) 『定親全』四・六(六二七)頁

(24) 『定親全』四・四(六二六)頁

(25) 『浄土和讃』「大経意」『定親全』二・三四(四八三)頁

(26) 『大無量寿経卷下』『真宗聖教全書』一・四四(八八)頁

(27) 「ラグーナ出版からの手紙」『JAICO産業カウンセリング九』日本産業カウンセラー協会・二〇一三・要略筆者

(28) 「メディア全体で「つながる」ことの大切さが問われている」河北新報編集委員・寺島英弥氏インタビュー

<http://synodos.jp/fukkou/4427>

(29) 現場とは現在の居場所といえる。現在、三重在住で同朋大学に縁の深い有志が中心(教区班)になって、二〇一一年七月より月に一度、桑名市にある寺町



商店街にて、「仏事（人生）相談―無料」という活動をしている。相談時間は、およそ朝の九時から一二時過ぎまで。寒暖や催しによって異なるが一〇名前後の方と対話をする。内容は、仏壇の荘厳や納骨、あるいは死別、病氣、仕事等の悲苦、それから活動への励ましなどである。宗祖の七五〇回御遠忌、そして東日本大震災を通していただいた心がある。それは縁ある方とつながって声を聞くという心、それを自分の形にするという機縁・元気なのかもしれない。尚、写真の有志は、本学卒業の白木俊正氏、原功氏、筆者である。写真提供は貝新フーズ・伊藤雅一氏。最後に、東北大学では二〇一二年九月に宗教・宗派をこえて現在の宗教的苦悩に応えるべく「臨床宗教師」の倫理綱領、育成を表明している。教化の内実としても注目すべき提言である。